異世界ですべき事

趣味ット戦闘機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界ですべき事

【Ｎコード】
Ｎ３０５０Ｔ

【作者名】
趣味ット戦闘機

【あらすじ】
ゲームとよく似た世界に飛ばされた主人公。レベルカンストの力を使って亜人、獣人等虐げられている亜人を助けるために奮闘する物語。

プロローグ「ＧＭからの宣告」

セカンドライフ・ファンタジアというＶＲＭＭＯＲＰＧがある。
ＮＰＣに技術公開さえされていない超高性能ＡＩ搭載。
五千を超えるのスキル数。
やり込み機能超充実。（例：レベル上限一万、インベントリ容量無限ｅｔｃ…）
白熱するギルド戦争。
超美麗グラフィック。

といったようにゲームの最高峰とでも言うべき内容のゲームであり、公式発表ではプレイヤーも日本で二千万人は居るらしい。

ただ、このゲームは国に敵視されている。

理由は単純。

まずゲームに使われている技術が公表されている技術のどれにも当てはまらない事。
その技術を制作会社が公表しないこと。
そしてさらには其の制作会社が何処にあるか分らないということ。
そもそも実体感出来るＲＰＧというのが既にありえない技術なのだが。

一つ目の理由に関してはプログラムを解析しようとしても特殊なプ

ログラム言語らしく日本のスパコンを使っても解読できないらしい。
二つ目は制作会社が何処にあるか分らないと追求できない以上三つ目の問題が出て来る。
直接サイトを閉鎖しようとしたら国お抱えハッカー総出でかかったというのに返り討ちを食らい一部の行政機関が混乱したため国も手出しができないので容認している、といった状況だ。
エリク（ゲーム内名）はそんなゲームのヘビーユーザー…いや、そんなものではなく最早このゲームが人生と言ってもおかしくないほどだ。その証拠にレベルはカンスト、スキル全習得、ステータスマックスを完了した。無限と思われていた機能の果てが見え始めた。
その結果付いたあ通り名は『絶対の有限』。
エリクの前では無限は存在できないとか言う意味があるらしい。
だが別にエリクは好きでそうなったわけではない。
エリクは現在１８歳、しかし先天性の病で体が右腕と頭以外満足に動かない。
だからこそエリクはこのゲームの虜となった。
エリクの体は現実では満足に動けない、だがゲームの中では自由に走り回ることができるのだ。
そして最後のやり込み機能である…と思われるアイテム全取得を完了したのが昨日。
最後のアイテムは『招待状』だった。

そして今日、エリクはＧＭ（ゲームマスター）を名乗る人物からこう告げられた。

曰く、選ばれた人間だと――――――

プロローグ「GMからの宣告」（後書き）

２０１１／５／２２　文章改訂です

1話「旅立ち」

「選ばれた？」

今エリクの目の前にはＧＭ（ゲームマスター）を名乗る人物が立っている。
見た目は１０代前半らしき少女、髪は銀髪で長く腰にかかるぐらい。
身長は１５０ぐらいだろう。

だが問題はそこではない。このゲームを初めて１０年、エリクは『このＧＭ』を見たことがないということだ。１０年もやっていれば自然とＧＭなんて覚えるもののはずなのに。
むしろエリクはこの世界で把握していないことのほうが少ないのだが。

「えぇ、その『招待状』を持っているということが何よりの証拠です」

そう言って少女は手元の羊皮紙の束を指す。

「これか…」

昨日手に入れたソレは羊皮紙を丸めて縛ったものだが何故か開けない。紐は解けないし外れない。使用するアイテムなのに使用できないといった状況だった。
しかしこのＧＭは何か知っているようだ。

「今、あなたはソレを使用できないはずです。」
「あぁそうだ、不具合なのか？」

「いえ、正常です。ソレを使用するに当たって幾つか質問をさせていただきますがよろしいですね？」

エリクはアイテム一つを使うのに質問をしなければならないのかと疑問に思ったが無難に答えた。

「別にいいが…」

「では――――――

質問の内容は最初は至って簡単なものだった。最初の方はこのゲームの世界観はどう思うとか、ＮＰＣについて好感を持っているかとか。多少嗜好に振れる部分があったが問題のないレベルだった。

「では次の質問です――――――

だが途中から急に質問の内容が変わった。

――――――貴方は必要と有らば、人を殺せますか？」

「どういう意味だ？」

エリク…最初見たときにこいつは何処かおかしいとは思っていた。本当にＧＭかどうかも怪しい。

問い返したエリクに対してＧＭは見透かすような笑みで

「そのままの意味ですよ」

と言ってきた。

「…そいつが俺もしくは仲間に対して一定以上の危害を与える者なら。まぁ実際どうかわ知らないがな」

エリクは別に人の体がどうこうといった事に興味がない。だから態々自分から喧嘩を売りに行くことは無かった。
ただし、相手から喧嘩を打ってきたのなら話は別。持てる力で徹底的に倒す。狙ったということは狙われることを覚悟してきたということだからだ。

「それでは最後の質問です――――――

（やっと最後か…一体なんなんだ？）

――――――現実に未練は有りますか？」

「無い」

即答だった。
エリクは入院生活には飽き飽きしていたしこのゲームがなかったら自殺でもしていたところだろう。
姉弟は居ないし両親もここ数年会っておらずエリクにとって未練に残るようなことは何一つ無かった。

「そうですか、なら……『ＧＭ権限：アイテム強制発動』」

瞬間、羊皮紙の束の紐が解け紙が辺りに回りだす。
まるでエリクを取り囲むように。

「これは何だ？」

エリクは自分でも驚くほど冷静だった。
今まで何万と戦闘を繰り返し、３０の職業の中でも最も扱いづらいとされる賢者を極めた経歴は伊達ではない。
今までと同じだったのならすぐに魔法で吹き飛ばしていただろう。

だがそれをしなかった。

「魔法の完全封印なんて聞いたことがないぞ？」

魔法が使えなかったのだ。

既に羊皮紙はエリクの視界全域を覆っている。

「向こうに着いたら、『私』を探して話を聞いてください」

少女が言ったと同時に、エリクは意識を失った――――――

1話「旅立ち」（後書き）

２０１１／５／２２　文章改訂です

2話「人助け？」

目を覚ましたエリクの視界に飛び込んできたのは森だった。

しかし見慣れたゲームの森ではない。

踏みしめる大地、吹く風、聞こえてくる鳥の鳴き声、全てが本物だった。

「…マップが開かない？…インベントリは正常、アイテムはあるし装備も万全……フレンドリストも不調か？ギルドリストも？」

ハルトは突然見知らぬ世界に飛ばされても冷静に、かつ迅速に状況確認をしていた。

気が動転していたからだったかもしれないが、それでも行動は早かった。

まずは此処がゲーム仕様ならば、ということでウィンドウの確認である。

「キャラクター情報は…」

名前：エリク
性別：男
レベル：１００００
召喚獣：５体
職業：賢者
装備：武器・宝刀雷切
　防具・賢者のローブ

容姿：（画像が表示されてると思ってください。）

髪が切れないから腰まである黒髪、運動ができないために身長１６０程度の女性並みに華奢な体、両親から受け継いだ中性的な顔、そしてさっきから耳に入る変声期を逃してしまった高めの声…

まさに現実でのエリクの容姿だった。

（…ゲームじゃないのか？　いや、ウィンドウは出てくるんだよな…）

だがキャラクター情報に本来表示されるはずのおおまかなＮＰＣ友好度やフレンド情報が出てきていない。

「これは…『自分に関わる情報』以外が見られない、か？」

開けているのはインベントリ、キャラクター情報、装備画面、スキル確認のみだ。

『現実に未練は有りますか？』

エリクはＧＭの言葉を思い出していた。

「異世界に飛ばさなくても良かっただろ……っていうか現実の体のはずなのに動けるし」

確かにエリクは現実には一切の興味がなかった。

学校にはいけず友達も居ない。両親とは年に数回しか会わない。

エリクにとってはゲームが全てだった。

「インベントリと装備があるのは唯一の救いか…」

幸いスキルは全部使えるみたいだし倉庫に預けてないインベントリ内のアイテムも使える。

これならまず死ぬことはないだろう。

「『位置確認(フィールドチェック)』…東の方角に人の気配、人がいるってことだ、行ってみるしか無いな。」

そう言ってエリクは人を求めて走りだした。

その後すぐに人影は見えた。だがエリクは焦っていた。

貴族風の格好をした少女がいかにも凶暴そうな四足の魔物に襲われていたからだ。周りには護衛と思わしき騎士の死体と馬車が見えた。

しかも魔物に止めを刺される寸前の状態で。

「ハッ！」

自分に補助魔法をかけ一瞬で近づき魔物に雷切で喉を斬りつける。魔物は生き絶えたようでその場に倒れこんだ。レベルカンストのエリクに一介の魔物が適うはずもなかった。

（雷熊（ボルトベア）か…そこまで強くない魔物だが…）

雷熊はレベルが３０００もあれば倒せる魔物のはずなのに護衛が壊滅させられていたのだ。

この世界の人はよほどレベルが低いということだろう。

すると少女が状況を整理できたのかエリクに話しかけた。

「…助けてくれてありがとう、だがそなたは誰じゃ？」

（しまったな…不用意に出てこなければよかった）

この世界でエリクの身元を証明する手段はない。よって怪しまれるわけにはいかない。

エリクの格好は装飾が多めの黒いローブに腰に日本刀。どうすれば誤魔化せるのか思案する。

「異世界から来ました！」これは論外。

「…唯の冒険者だ」

「…そうか、お礼がしたいのだが、城まで来てくれんか？」

エリクは一瞬迷うが。

「いや、急ぎの用があるので失礼する」

少女は『城』と言った。それはこの少女が王族か何かということだ。エリクは不用意に近づくべきではないと判断し『不可視化（インビジブル）』を使い森の道沿いに街を目指し走り始めた。

魔物に襲われたときは騎士に守られていた。だが騎士では歯が立たなかった。騎士の剣は剛毛には通じず、炎の魔法もかわされ周囲の木から煙を出させる程度にしかならなかった。

少女は誰かが差し向けたのかと思ったが無理なことだった。大人しい魔物ならまだしもこれほど凶暴な魔物を手なずけるなど不可能だ。逃げようにも最初の奇襲で馬車は壊され馬は既に逃げた後。生身で走って逃げ切れるほど遅い相手ではない。

しかしそんな窮地をいきなり救われた。騎士が２０人がかりで倒せなかった雷熊を『黒髪の黒いローブを着た女性』が一切りで倒してしまったのだ。しかも不可視の魔術まで使えるときた、コレほどの実力があるのならギルドで有名になっていなければおかしい。

「…命の恩人に対して私はなにを言っているのじゃ」

助けられた場所は森に入って徒歩で３０分ほどの場所だったのです
ぐに森は抜けられるだろう。少女は街に向かって歩いていた。

「あの女性…きれいだったのぅ…」

別に誰に向けた言葉ではない。それは本心の言葉だった。

エリクが女性だと言う勘違いはあるのだが。

2話「人助け？」（後書き）

２０１１／５／２２　文章改訂です

3話「巫女…？」

「ゲームの所持金が使えるなら金には困らないか…」

現在エリクは街――――――リバリーの宿屋に居る。

所持金が使えることを確認すると考えをまとめるためにすぐに宿に入ったのだ。

「問題はあの銀髪の少女だな…」

エリクの一旦の目標は自分を異世界に飛ばした少女に会うこと。少女自体自分を探せと言っていたので何か分かるかもしれないから、という理由だ。

だが街で見た人の髪は金や青、緑、茶などが主流だった。

宿屋の女将に「銀髪の少女を探している」と聞いたところ、

「銀髪なんてのは見たことないねぇ…あ、でも似たような噂は聞いたことあるよ。何でも城の地下には家より大きい扉があってその奥には銀の魔女が住んでいるとか…まぁ噂だけどね」

という返答が帰ってきている。

銀の魔女、という言葉に不安を覚えたが現状それしか情報がないのでエリクはその噂を信じることにした。

「選択肢は真正面から行くか、それとも忍びこむか…」

エリクは5分ほど考え

「真正面からは無理だな、一般人が入れる訳ないし。問題は忍びこむ方法か、まぁ『不可視化』使えば大丈夫か」

その言葉を最後に宿の一室からは人影が消えていた。

エリクは不可視化を使い兵士の目を快潜りながら城の地下を目指して走っていた。

「案外簡単に着いたな…っていうか噂本当だったのか」

エリクの前にあるのは巨大な扉、大きさは3メートル程もあり噂とも一致する。

扉は白黒だが流線型のきれいな模様が入っていて貫禄がある。

だが開こうとしたがあかなかった。しかし鍵穴は見当たらない。

「む、鍵……なのか？…確か解錠の呪文は……

『風よ、我の名に於いて立ち塞がる障害を解除せよ、解除（アンロック）』

…問題なく効くか」

扉が開いたのでエリクはそのまま扉の中に入る。

「これは…地下なのか？」

解錠された巨大な扉の中に入るとそこには地下なのに森が広がっていた。道が一直線上にありその奥には神殿のような建物が建っていた。

エリクはすぐに神殿に向かった。

神殿に部屋は一つしか無くそこには例の『銀髪の少女』が眠っていた。

「おい、起きろ」

「……ん…？」

エリクが声をかけると少女は直ぐに目を覚まし、

「…？　もう来たんですか…？」

まるで最初からエリクが来るのが分かっていたようにそう言った。

「何者だ？」

エリクは怪訝な顔で少女に問いかける。

「私は巫女、それ以上でもそれ以下でもありません。主を導くために此処に居ます。向こうで私に会居ましたよね。まさか何の意味も無しに異世界に飛ばされたとは思って無いですよね？」

何処か気怠そうな面持ちで少女は続ける。

「向こうでは『絶対の有限』だとか呼ばれているそうですが…的を得た名前ですよね、あれ。まぁ今のところそんなことは関係ないんですが…。とりあえずそこにある『知識の鏡』に触れればだいたいの事は分かると思うのでさっさと触れてください」

そう言って少女は部屋の片隅にある鏡を指さした。

「…何故そこまで知っている？（巫女ってこんなに言葉遣い悪いのか？）」

少女の言葉にエリクはさらに警戒を深めたようだった。

「疑り深いですね…まぁそうでもなければ此処には居ませんか。別に罠ではないから安心してください。それと貶された気がするのは気のせいですか？」

気のせいだ、と言いながらも何の躊躇もなく発せられる少女の言葉にエリクは半ば諦めたように鏡に触れる。

「…何も起きないが」

特に何も起きなかった。

「そんなにすぐに知識詰め込んだら壊れますよ？死にたいならいいですけど。その鏡に触れるといろんなことがすぐに理解できるようになるんです。便利でしょう？」

「それはたしかに便利だな。で、結局俺はこの世界で何をすればいいんだ？」

「そんなもの自分で決めるに決まってるじゃないですか。巫女っていっても神様は詳しいことを教えてくれないしいろいろ大変なんですよ？」

「…了解した、ではさっさと戻るとしよう」

その言葉を最後に去ろうとした時、

「私も行きますよ、折角目覚めたんですからこんな面白いこと放っておけません」

「…レベルは？」

「おぉ、連れていってくれる前提ですか！　８３２９の職業は武装巫女です。よろしくお願いしますね」

エリクはその「武装巫女」という言葉に疑問を感じたがどうせ言葉通りの意味だろうと思い聞かないでおいた。というより聞いてはいけないような気がした。

「これからどうなるんだ…」

「きっと楽しくなりますよ」

それはお前だけだろうという突っ込みはエリクの心の中だけにとどまった。

4話「目標設定」

「お前ってずっと眠ってたんだよな？　なんで噂になってたんだ？」

宿の一室、現在エリクは『巫女』にいろいろと質問していた。

その後エリクたちは宿に帰ってきたがまだ夕方だったため『巫女』用にもう一部屋借り、現在はエリクの部屋で話し込んでいる。

「あぁそれですか。私は大体１００年前ぐらいに生まれたんですが眠っているだけというのがあまりにも暇で暇で、意識有りましたからね。それで霊体として街を見に行ってたんですがその時にどうも見られてしまったようです」

「ってことはこの世界の常識ぐらいは知ってるのか」

「そうですね。そう言えばあなたのことはある程度知っていますが具体的にどういう感じなのかは知らないんですよね。まぁ一つだけあるんですが」

『巫女』の意味深な台詞にエリクが顔を顰める。

「その一つがやけに気になるが…まぁいい。とりあえず貨幣価値ぐらいは知っておかないとまずいか？　他にも色いろあるなら今まとめて教えてくれ、『巫女』」

「その“巫女”って言うのやめて下さい。一応神様から『エトラ』って名前もらってるんですから」

「俺の名前にやけに似てるのは気にしない方向でいいのか？」
「神様も面倒なんでしょう。で、御主人は此処の常識をどれほど知っているのですか？」
「エトラがどこまで知っているのかは知らないが、ぶっちゃけ俺は全部知らない」
宿に来るまでで“御主人”と呼ばれるのには慣れたらしく特に気にしている様子もない。
エリクが此処の常識を知らないというのは既に言うまでもない。
「全部ですか…面倒ですね。とりあえずステータスカードからです。」
そう言うとエトラの手に手の平サイズのカードが現れる。
よくみると文字が書いてあるのがわかる。日本語だった。
「ステータスカードは個人情報の塊みたいなもので名前、職業、レベル、所属ギルドが書いてあります。御主人や私の場合はレベルが異常なので人には見せないほうがいいでしょうね。念じることで簡単に出てきます」
やって見ると確かにエリクにも簡単に出すことができた。
「ギルドって言うのは？」
「仕事の仲介組織みたいなものです。所属は拠点にしているギルドの地名が表示されます。実力はG~Sで評価されますが一般的なC、Bで１０００レベルぐらいでSでも２０００程度ですから私たちは

異常と言って問題ないですね」
改めてこの世界での自分の異常性に気づかされたエリクであったがそんなモノは既にゲームの世界でも感じていた。

一般的なプレイヤーのレベルは２０００程。そこからはレベル上げに尋常ではない時間と労力が必要になる。趣味にそこまで時間と労力をかける者は少なく、廃人でも一日中するわけにはいかないので５０００程度だった。

しかし『エリク』は一日中ベッドの上、食事は取れず点滴での栄養摂取、疲労の少なさから睡眠時間も短い。等等時間はそれこそ有り余るほどあった為他のプレイヤーからどんどんレベルが離れていった。

最初に問題が起きたのはギルド戦争の時。エリクが居る、それだけでその陣営が勝ってしまうほどの戦力だった。その為基本的にエリクは個人でギルドを持っており平和主義なギルドになった。
次はエリクの事を知らない奴に喧嘩を売られた時。とっさの反撃を食らったチンピラ二人は精神的なショックを受けゲームを辞めた。
等様々な逸話を持っておりゲームプレイヤーでエリクを知らないものは居ないほどだった。だがそれは何か違うものを見ているような視線でもあった。

「分かった。次を頼む」

「流石『知恵の鏡』ですね。理解が早くて助かります。

次は貨幣価値です。小銅貨１０枚で銅貨、銅貨１０枚で小銀貨といったように１０枚ずつで１ランクアップです。価値は低い順に銅貨、銀貨、金貨、晶貨となっています。具体的な数字ですが小銅貨一枚で１０ギルです。そう言えばゲーム内の貨幣でしたね。何ギル持ってるんですか？」

「銅貨とかは初めて聞いたが。えっと…５０兆ギルか？」

「５０兆！？」

エトラが思いっきりむせた。エリクのあまりの所持金の多さに。

「いいですか？　大体小金貨２枚、２０万ギルあれば一ヶ月裕福に暮らせます。盗み見ただけですが国の１年の予算が大体１００億ギルでしたよ？　５０兆って何ですか、富豪ってレベルじゃないですよ？」

「まぁ金はあって困ることはないしいいんじゃないか？　問題はこれからどうするかだ。常識とか細かい部分はあとで覚えればいいからな」

そう言って話題を変える。エトラからは批判のような目が向けられているがエリクは無視を決め通している。

少ししてエトラが諦めたようだ。

「…まぁ無難にギルド登録をして情報を集めましょう。」

「レベルがばれる心配は？」

「無いですね。登録に必要なのは名前だけです」

「じゃぁ明日、おやすみ」

「おやすみなさい」

その言葉を最後にエトラは部屋に戻っていった。

4話「目標設定」（後書き）

亜人、出てこないですね。出したいのに出せない、厳しいです。

5話「ギルド登録」

現在ギルド前の広場には人だかりが出来ていた。
其の中心に立つエリクがもう一人の中心に向かって声をかける。

「最後に聞いておくが装備は壊れても問題ないんだな？」

「へっ！　テメェに壊せたらの話だがな！」

「チッ（ダメか…面倒だな）」

この男、エリク達がギルド登録をしようとした時にエリクを女だと勘違いしてセクハラをしてきたのである。そのまま成り行きで決闘になったがこの男がどうもAランクらしく簡単に勝ってしまっていいのか悩んでいたところだった。

決闘はギルド公認のものなので殺さない限りルールは無く、装備の破損なども自己責任となっている。ただ物騒なのであまり使われることもない制度だった。

「おい審判！　さっさと始めろ！」

男が決闘の開始を促す。

「両者準備はいいですか？」

男が剣を構えるがエリクは全く動かない。むしろ戦っていいのかまだ悩んでいた。

「御主人、構わないですからさっさと終わらせてください」
エトラの言葉に「そうか」と頷くと雷切に手をかける。
「それでは…始め！」
開始と同時に男が斬りかかる。
「もらった……ぁ？」
剣がエリクに当たる瞬間、エリクが消えた。
説明は簡単。ただ居合い切りで剣を切りそのまま男の後ろまで進んだだけ。
だがそれを実行するとなると常人にはまず不可能だ。
「なっ！？　剣が…」
「で？　まだやるのか？」
「クソッ！　覚えてやがれ！」
「その台詞を使ったら負けだと思う」
「負けたから使うんじゃないですか？」
捨て台詞と共に逃げ出す男を見た後、エリクたちはギルドへ登録しに戻っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

「はい、これで登録は完了です。先程の決闘でＡランク冒険者を倒していたので特例としてお二人ともＢランクからの開始となります。ランクを上げるには同じランクの依頼を１０回クリアするか１つ上のランクを５回、もしくは２つ上のランクを１回クリアすればランクアップです。早速依頼を受けることもできますがどうしますか？」

「エトラ、何かいい依頼はあったか？」

さっきからエトラは登録をほったらかしにして依頼ばかり見ていた。登録に個人情報とかは不必要なのでエリクが代わりに登録したのだ。

「んー…レベルはＳまでですよね？　だったらこの『雷熊討伐』とかはどうですか？　森までは近いですし」

「…それは昨日倒した」

「そうですか。なら…」

そこまで言って受付嬢に止められた。

「あのー…もしかして依頼を受ける前に倒してしまわれたんですか？　それなら確認を済ませた後依頼達成ということにできますがどうしますか？」

「そうなのか、頼む」

「了解しました」

「じゃぁ今日はもういいですよね。お金はあるんだから昨日よりいいところ泊まりましょうよ」

「調子に乗ってるとすぐに無くなるぞ…」

エリクは溜息をつく。だが宿に泊まったところでなくなるような金額でもない。

「こっちです♪」

「明日からは仕事だからな?」

「分かってますって!」

「王女様、今日ギルド前の広場で『黒のローブに見慣れない剣を持った者』が決闘を行ったそうです」

リバリー城内、王女の私室。そこでは王女と黒服の男が話をしていた。

「結果は?」

「黒いローブの圧勝だそうです」

「その後は？」

「ギルドに登録し、この街一番の宿をとっていました。あとは連れが一人」

「そう、もう行っていいわ」

「はっ！」

黒服は一瞬で姿を消す。王女は少し驚くがいつものことだと思い椅子に座る。

「どうにかして呼び出せないものかしら…」

この日、夜になってもしばらく王女は考え事をしていたという。

6話「謁見」

「なぁエトラ…何でこんな事になったんだ？」

「人助けなんてしてるからですよ」

エリクたちはリバリー王城謁見の間に居た。今日の朝宿屋を出ようとしたところを

「王女様が直々に会いたいと言って居られるため城まで来てもらう！」

と騎士の方の言われたから仕方なく出向いたのだ。まぁいきなり30人も宿に騎士が来れば行かないという選択肢は取れないだろう。

そして現在眼の前に居るのはエリクがあの時助けた貴族風の少女。どうも王女だったらしい。

「さて、今回態々貴殿らに――――――

王女の側近らしき人の長い話が始まる。エリクもエトラもきれいに聞き流しているようだ。

「宰相、話が長いからちょっと黙っておれ」

しかしあまりにも長かったので王女が遮った。

「何か王女とは気が合う気がするな」

「御主人？　あの人仮にもこの国の権力者ですよ？　それより王女に向かってその口ですか」

「いや別によくね？」

「周りをよく見てください周りを」

「は？」

当たり前のようにエリクは言ったが周りには騎士団長や国の有力貴族達が立っている。彼らもそこまで忠誠を誓っているわけではないが真っ只中でそんな発言をすればどうなるかといえば分かりきっている。

「なんと無礼な！」「処断してしまえ！」「処断でさえ温い！」

「あ…やべぇ」

「だから言ったでしょう…」

エリクが軽く後悔しているところに

「お主らも黙らんか！！」

と王女が救いの手を差し伸べた。

「ふぅ…言葉遣いなどどうでも良いわ。しかし面倒なことになったのぅ…」

「何が？」

「お主はこの空気の中で話をしようというのか？」

「…そうだな」

王女が居なければすぐにでもエリクを殺しにかかるほどの殺気を纏った家臣たちが睨みつけている。例えるなら敵陣の中心にスパイが躍り出たようなものだ。

「後で私の私室に来い。そこで話す故謁見は終了じゃ！」

その言葉を最後に謁見は終わったが家臣たちの怒りが終わるわけではなかった。

「で、結局用事ってなんなんだ？」

「そんな口調で話されるのは初めてじゃな…」

「そうなのか？」

「御主人が話すと面倒なので黙っててください」

「お前絶対俺のこと御主人って思ってないよな？」

「だからお主ら話を聞けと言っておるだろう…」

謁見の少し後、王女の私室では3人で会談のような者が行われていた。表向きの理由は助けてもらったお礼と言うことになっている。

「まぁいいわ、今回呼び出したのは仲間になってもらうためじゃ」

「国にか？　というか仲間？　家臣じゃなくてか？」

「そうじゃ。どうせ家臣になる気なんて無いのじゃろう？」

「確かに無いな」

「で、その組織が表沙汰にはできんのでの…この手紙を持ってフォズの森に行け。仲間が見つけてくれるはずじゃ」

そう言って手紙にしてはやけに大きい封筒を差し出す。エリクは無くさないようにとインベントリに収納したところ

「あぁ、森に入るときはその…なんじゃ？　手に持って入るんじゃぞ？」

「了解した」

――――――――――――――――――――――――

その後宿に戻ったエリクは

「そう言えば王女の名前聞いてなかったな…」

と呟いていた。

6話「謁見」（後書き）

遅れてしまいました。遅れた上に文章が微妙って言うのは申し訳ないです。

番外　人物紹介と設定

【人物紹介】

名前：エリク（Ｌｖ１００００）
性別：男
年齢１８歳
二つ名：絶対の有限（ゲーム内）
職業：賢者
見た目：どう見ても女である。華奢な体、腰まである黒髪、１６０程度の身長、ついでに子どもの声。だが男だ。
解説：現実では全くと言っていいほど体が動かないため入院生活。情操教育とかあんましやってない。ただしゲームのおかげで何とかなってる。
性格：友達に対してはやさしい、が敵に関しては容赦ない。戦いは好きじゃない。

名前：エトラ（ＬＶ８３２９）
性別：女
年齢：１７歳（生まれてからしばらく年取ってない）
二つ名：無し
職業：武装巫女
見た目：瞳は銀。銀髪で長さはエリクと同じく腰に掛かる程度。身長は１５０と小さめ。神秘的に見えないこともなく顔立ちも整っている。
解説：エリクを異世界に飛ばした神様の巫女。ただし職業の名前のとおり武装している。鉈（なた）が主な武器。生まれた日から数えれば１０

０歳越。
性格：巫女の割に良く毒を吐く。別に心から貶しているわけではないので安心。

名前：王女（まだ名前出てない）
性別：女
年齢：１５歳
二つ名：無し
職業：王女
見た目：金髪碧眼でショートカット。王族っぽい雰囲気を醸し出しているものの勘違いが酷い（現在もエリクが女だと思っている）ので間抜け顔になることもしばしば。１６０ｃｍ
解説：リバリーの王女。兄妹が居たりはしない。
性格：上記もあるが勘違いが酷い。臣下の意見を聞かないときは大抵何か大事を抱えてる。基本的には普通に王女をしているような感じだが傲慢ではない。

名前：決闘で剣を壊されたかわいそうな人。
その他：特に設定はない。

【その他設定】

『職業に関して』

基本的には自由。ただし『最終職業』に就くと変更不可になる。
職業ごとにステータス補正がつき、魔法や特技の威力も変わる。特

殊能力があるのはある。

〈例〉

賢者は攻撃魔法特化１７０％威力。補助魔法は５０％で近接系は８０％。魔法同時展開

武装巫女は補助優先で１５０％効果。攻撃魔法は９０％で近接は６０％。詠唱簡略化。

『インベントリに関して』

ゲームにあるものだったら何でもはいってます。量が多いので割愛。

〈例〉

回復薬や武器類。防具や召喚獣の契約道具。

『召喚獣に関して』

一度に契約できるのは５体まで。ただし道具で簡単に契約できる。同時召喚は出来る。Ｌｖは召喚者－２０％になる。１時間で消える。

『エリクのステータスとか魔法とか』

ＭＰはまずなくならない。ＨＰは役に立たない、けど防御力はある

のでまぁ死なない。
職業補正があるので近接はＬＶ５０００の戦士程度。
魔法は中級以上には詠唱が必要。同時展開は賢者固有。５つまで。

番外　人物紹介と設定（後書き）

質問があったらまた増やします。

キャラこれだけ…？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3050t/

異世界ですべき事

2011年6月14日17時44分発行